

『社会科の窓—富山県版』1963年4月（東京書籍）

発刊によせて

国立教育研究所 矢口 新

社会科が発足してから十五年になるが、必ずしも順調にのびて来ているとは言えないようである。人によっては手直しを必要とする時が来ているなどという人もいる。低学年の社会科は効果がすくないので廃止する方がよいなどという人もいる。それは或る意味で社会科の解体論につながるのかも知れない。そういう議論が出るだけ、社会科はまだ若いのであろう。国語や算数などを解体せよという人はいないのである。若い社会科にいろいろ議論が出るのは当たり前である。しかしまたその古くからある国語だって、最近言語教育の立場から根本的な問題が提供されている。確かに言語教育の立場から見ると今の日本の国語科は国語教育としての体をなさないのである。それに比べたら、社会科などはもっともっと問題が出て、論議をかさねて、本物になる努力をするべきであらう。

いわゆる雑誌というのはどれ位望まれているものであろうか。私は雑誌のあり方についてはかねてから疑問をもっている。多くの雑誌が、スレックラシの学者だの評論家などの愚にもつかない論議をかかげている。こういう私もそのスレックラシの一人であるが、私のように自覚症状あるのはまだいい方ではないだろうか。いわゆる学者がむつかしい言葉を使って観念論をふり廻しているが、あまり現実には役に立たない。本当に現場の実践に結びついて、研究を重ねていないのである。そういうのを有り難がって拝見している先生方や、スレックラシのまねをする現場の先生がいるのも、はなもちならぬことである。わけのわからないことを一生けんめいああでもない、こうでもないといひねくり廻して、現場で実践しようとしても土台ははじめからわけのわからんことだからうまくゆく筈がないのである。

全くもって無駄な話である。しかしそういうスレックラシに食べ物にされている雑誌が多いのである。いな、そういうスレックラシを雑誌が養っているのである。コマーシャルイズムというのは全く始末におえないものだと思う。しかしそれも現場の先生方の自信の問題だと思う。現場の先生が自分の実践を本当に大切に、毎日の自己の生命の営みをよりよくすることに生甲斐を感じて、本物をつくり出す努力をしさえすればよいのである。

ここ十数年来富山県には、私は人一倍つきあっていた。こんなに長く、こんなにしばしば、富山県にかわいがっていただいた（？）人間はいないかも知れないと私はうぬばれている。私は私なりに、一生けんめい一緒になって勉強して来たつもりである。どういふ不思議な因縁なのだろうか。私は富山県の先生方が好きなのである。やや封建的で人間関係に気を使いすぎてエネルギーを損している所がなきにしもあらずであるが、概して本物を生み出す努力をする先生方が多いという点では、全国においてもすぐれた県であると思う。

私は先生方がもっともっとザックバランに自分の研究をぶちまけるチャンスがあつてよいと思う。ザックバランに物を言って、こだわらない人間関係が出来るとよいと思う。遠慮しながら物を言って、本物を見失って行くのでは、短い人生があまりにかわいそうではないか。

社会科の窓は教科書会社がおそらくサービスのつり出してくれるものだと思うが、嫌な商売根性を出さないで、本物を育てるための努力をしてもらいたいものである。みんなのびのびと物を言って、明るく、本物をつくる努力をしようではないか。